

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 210 回 企業の社会性とその貢献について

2007.7.15

ロータリークラブの精神的支柱の一つに、「職業奉仕」というものがある。ロータリアンの各企業は、自らの職業を通して社会に奉仕していかねばならぬ、ただ、儲けることのみを追及していくのは、企業本来の目的ではなく、**society** の一員としての役割を果たす義務がある...という考え方である。

その具体的方策は、色々あると思う。福祉団体、環境改善、文化や教育関係へ寄付するというのも、分かり易い方法であろう。もっとも順当な方法は、健全経営の中で企業利益を計上し、納税という方法で社会へ貢献していくことかもしれない。あるいは、地域の雇用を活性化し、人件費という費用を通して地域住民の安定的生活を確保することも、大きな意義があると思う。そして企業の本来の機能として、良質な商品やサービスを提供し、社会的付加価値を高めることも、企業の重要な役割といえる。

小生、決して熱心なロータリアンではないが、企業の存在が、決して社会と無関係にあるとは思えない。かつてのカーネギーや最近のビル・ゲイツに学ぶまでもなく、儲けの一部を社会に還元するという発想は、アメリカーナの基本思想であるように思える。アメリカに限らず、江戸商人の経営哲学、サントリー、松下、トヨタといった我国を代表する超一流企業の思想も、この点に関しては全く引けをとらないだろう。

こんな発想を原点に抱けば、みみっちい脱税や、小手先の脱法行為(ごまかしや虚偽、不正行為)を繰り返し、微々たる利益を作り出すことに躍起になっている独裁者社長、儲ける事しか念頭にない現代の「成金」達、マネジメントよりマネーゲームに勤しむ幼稚的未熟な若者達、こんな連中は「企業」を**経営する資格がない**と言っていいかもしれない。

こんな輩と、決して同類項ではないが、先般、マスコミの寵児「**星野リゾート**」の星野社長とディスカッションした。彼もある意味では、間違いなく、時代へのチャレンジャーと評価される人物の一人である。

彼は見事に言い切っていた。

「地域の旅館組合や商工会なんぞにいくら払っても、何も地域は変わらない。地域をよくするのは、我社が繁栄し、他の旅館がそれを競合・脅威に思い、一緒になって頑張ればいい...地域との付き合いは、むしろ足かせになる」~こんなニュアンスだった。

いかにも「星野流」の主張であり、あるいはこれからの時代の、一つの新しい提言となるのかもしれない。

が、全く小生とは考えが合わない。10年、20年先の「星野リゾート」が、次代を担う大きな産業として定着した時初めて、彼の考えを受け入れようと思っている。

企業の社会性は、今後の大きなテーマの一つである。企業の立地が地域社会の中にあるとすれば、地域と企業が無縁であるはずがない。倒産による社会的影響を考えれば、我企業が社会の一構成員である限り、ゴーイングコンサーンを目指し、社会貢献を果たすべきだと思っている。